

[024_1985]第二十四回中央図書館貴重文物展観目録 ： 西欧農学古典文庫の解題 ： 英書

九州大学附属図書館中央図書館

岩片，磯雄
九州大学農学部：教授

<https://doi.org/10.15017/1485134>

出版情報：大学広報. 529, pp.1-6, 1985-02-26. The Committee of Public Relations Kyushu University

バージョン：

権利関係：

大学広報

№. 529

昭和60年2月26日発行

(編集)
九州大学広報委員会

第二十四回中央図書館貴重文物展観目録

(中央図書館)

西欧農学古典文庫の解題—英書2—

はじめに

展観に際し教職員や学生諸君が多数来館されるよう希望します。

なお、今回の展観資料の選定、解説、配列等については本学岩片磯雄名誉教授に御指導御尽力を頂きました。ここに厚くお礼申し上げます。

記

展観場所 : 中央図書館メインロビー

展観期間 : 昭和60年3月2日(土)から

昭和60年3月30日(土)まで

展 観 資 料 の 解 説

20 Hale, Thomas (生没年次不詳) – A Compleat Body of Husbandry, London, 1756.

Tull の死後、新農法についての論議は忘れ去られたかに見えたが、これについて地味な研究を重ねていた著者が、本書の中で Tull の新農法論を擁護・展開する論述を行い、Tull 農法が復活する端緒をなした。彼は当時 Tull 農法を部分的に採用する人が少なかった実態に省み、条播、中耕、深耕は一体のもので、別々に行うべきでないこと、条間の幅は作物の種類によって異なるべきことなどを注意している。

21 Duhamel du Monceau, Henri Louis (1700–82) – A Practical Treatise of Hausbandry, 2nd ed., London, 1762.

著者はパリに生まれて正規の教育を受け、農業の科学的基礎を明らかにすることに努めた。1750 年以降、Tull の新農法について実験的研究を行い、次の表題で Tull の著作をフランス語に意識した。

Traité de la Culture des Terres suivant les principes de M. Tull, Anglais, Paris, 1750–6, 6 vols.

次いで多くの論文を書いたが、それらを英訳して本に纏めて出版したのが本書である。右側図版の下図は彼の推賞した一輪犁、その他は各部の説明。

22 Duhamel du Monceau, Henri Louis – The Elements of Agriculture, 2 vols, London, 1764.

Tull の新農法に確信を得た著者は、次の書を公刊した。

Éléments d' Agriculture, Paris, 2 vol, 1763.

それを英訳して一年おくれて出版されたのが本書である。本書はイギリスにおける Tull 農法の復活に対して、決定的な役割を演じたのみでなく、農業がはるかにおいていたフランスにも大変な影響を及ぼした。

23 Dickson, Adam (1721–76) – A Treatise of Agriculture, 2 vols, Edinburgh, 1st ed., 1764, 1769.

Tull 農法の普及と新作物としてのカブの導入に伴って、休閒無用論が次第に一般化してゆく中で、気候が寒く、ロンドンのような大市場から遠く離れているスコットランドを背景にして、

「休閒無用論」に敢然と立ち向った著作で、約 30 年後にイギリスの農業調査会が設立されるに伴い、本書の骨子はほぼそのまま容認される。図版はスコットランド犁。

24 Dickson, Adam—The Husbandry of the Ancients, 2 vols, Edinburgh, 1788.

前著 Treatise の中で、休閒は不可欠であり、スコットランドでは旧来は耕地と草地 (lee) を交替させる粗放な農業を行っていたのだが、それが休閒を取入れて lee をなくしたのは、大きな進歩だったとした。かくて休閒無用論に対しては、農業は極めて長期にわたって考察する必要があるとして、Columella らのローマ農書に親しんだ。そして間もなく印刷に附する段取りになっていたのだが、内容に誤りが無いよう慎重に原稿を点検しているときに、ある日落馬して突然に死去し、原稿はそのままになってしまった。彼はエジンバラ大学を優秀な成績で卒業し、ラテン語にも長じていたので、彼の死後周辺のものが彼の娘の承諾を得て出版したのが本書である。

25 Young, Arthur (1741—1820) —The Farmer's Letters to the People of England, 2 vols, 1st ed, 1767, London, 1771.

著者の生涯については、この文庫にも所蔵されている Betham—Edwards, M. - The Autobiography of Arthur Young, 1898, London. の外、近年 Mingay, G. E. - Arthur Young and his Times, 1975, Bristol. が出版されているので、詳細に知ることができる。当初農場経営を志して産を失い、農書著述家に転じて著名になった。極めて多作で Mingay の挙げているものだけでも 50 冊に達する。しかもほとんどが、部厚い単行本である。最初の著作は 1758 年に出版されたが、著名なものとしては本書が最初のものである。ここに展示したのは、数多い著作の中で理論的に最も貴重なものだけで、旅行記はすべて除外した。

本書は農業改良の重要性、それによる人口扶養力、ならびに一農場の設定について述べたものであって、第 1 冊は To the People of England, 第 2 冊は To the Landlords of Great—Britain の副題がついている。

26 Young, Arthur—A Course of Experimental Agriculture, 2 vols, London, 1770.

これは副題に示されているように、いろいろの土壌からなる 300 エーカーの農場で、5 カ年にわたって行った農業比較実験の結果を集録したもので、実験の内容は新作物に属する多くの飼料作物や牧草の種々の栽培方法別の成績の比較、各種家畜の飼育方法の相違による飼養成績の比較、犁耕その他の耕作方法の比較、とりわけ Tull 式新農法と旧農法との比較を極めて具

体的に示したものの。後にドイツの極めて著名な農学者テーアが Albrecht Thaer—Einleitung zur Kenntniss der englischen Landwirthschaft, 3 Bde, 1801—04. (次回に展示予定)の中で激賞した本である。だがよく注意して読むと、これだけ数多くの比較実験を、多くの労力をかけずにどうして実施できたのかに、首をかしげざるを得ない。いづれにせよ G. E. Mingay によれば、出版後やがて著者は市場に出回った本書をすべて買い求めて、焼却してしまった。そのために入手が極めて困難な書になったといわれる。

27 Young, Arthur—Rural Economy; or, Essay on the Practical Parts of Husbandry, London, 1770.

本書は Young の中で最も体系的・理論的な著作で、農業を有利に経営する場合の原則として「適正比例」(just proportion)または「農場の調和」(proportion of farm)の理を説いた。そしてこの原則に基づくためには、資本力の豊かな大経営でなくてはならず、何ごとにも節約的で自ら卒先して働く farmer すなわち小作農企業者でなければならないとし、したがって長期にわたる小作契約が必要であるとした。

28 Young, Arthur—The Farmer's Kalendar; or, Monthly Directory for all Sorts of Country Business, London, 1771.

本書は農業の一年間の行事を述べたもので、イギリス農業の実際を知るうえで貴重な文献である。ただ Rural Economy 中の“Of the New Husbandry”の中で Tull 農法を論難し、「Tull の死とともに『条播の精神』(spirit of drilling)は葬り去られた」と書きながら、本書の中では、多くの作物について条播を行っているなどの矛盾が見られる。

29 Young, Arthur—The Farmer's Guide in Hiring and Stocking Farms, 1st ed., 1770, 2 vols, London, 1771.

Farmer's Letters の中で大経営の優越を唱った著者が、実際の農業経営設計と収支計算に基づき、農業資本の大小による収益性の相違を実証的に明らかにし、さらに経営面積の拡大と集約性の増進とは、併行するものであることを示した貴重な文献である。

30 Young, Arthur—Political Arithmetic, London, 1774, New York, 1967.

本書は Young の著作の中で最も有名で、従来最も多く引用されてきたものである。主な内容は、大経営の優越、困込みの推進の必要、小作契約長期化の緊要性など、主に農業政策を論じ

たものである。

31 Sinclair, John (1754–1835) – An Account of the System of Husbandry adopted in the more improved Districts of Scotland, Edinburgh, 1812.

著者の生涯に関しては近年 Rosalind Mitchison – Agricultural Sir John, The Life of Sir John Sinclair of Ulbster, 1962, London. が出版されたので詳しく知ることができる。1793年イギリスに「農業調査会」(A Board of Agriculture)が設立されると、最適任者としてその会長に押され、Arthur Young ら大勢の調査員を指揮して、イギリス各地の農業のあるべき形態を明らかにすることに努めた。

本書ではスコットランドがいまやかつてのイングランドの Norfolk に代って、イギリス内の先進地になったとし、その理由として、スコットランドでは多くの農民がいち早く Tull 農法を改良・導入して、地理的悪条件を克服し、加えて長期小作が実現したことなどを挙げている。

図版の上段は 300 エーカーの粘土、下段は 480 エーカーの軽鬆土の土壌の農場の作付方式を示したもの。

32 Sinclair, John – The Code of Agriculture, London, 1817.

Adam Dickson がスコットランドのような悪条件の地では、休閒は不可欠であるとしたのに対し、Arthur Young はいまやカブの導入によって休閒は不必要悪であるとし、世間から“Anti-Fallow Mania”と批評された。こうした問題をかかえた農業調査会はイギリス各地で地道な調査を継続し、加えて今回は展示しなかったが、Young に準じて豊富な調査研究を行った人としてよく知られている W. Marshall の諸調査をも考量して、気候、土壌、市場条件などを考慮して、イギリス各地の農業の基準、すなわち Code を明確にした書物である。

左は著者の肖像。

33 London, John Claudius (1782–1843)

I. **An Encyclopaedia of Agriculture, 1st ed., London, 1825; eighth edition, 1883.**

II. **An Encyclopaedia of Gardening, 1st ed., London, 1811, the second ed., much enlarged, 1824.**

III. **An Encyclopaedia of Plants, 1st ed., London, 1826, 1836.**

I. は著者が大きな農書に加えて、London にある Weir の農業博物館、Edinburgh の Morton その他多くの人々の好意のもとに著作した大著で、イギリスのみならず世界の主な国

々の農業の歴史、実態から農学諸分野にわたって、多くの貴重な図版を入れて解説し、最後に農学書誌および索引を附している。印刷の細かさを考慮すれば、尨大な著作である。左側の図版は飼料カブの栽培法。

Ⅱ. ほぼⅠに準じ野菜・花・果樹について叙したもの。

Ⅲ. イギリスを主体とした尨大な数の植物の性質、導入の歴史などについて叙述し、約1万種の図版が附されたもので、これは Loudon の編著である。

見開きの右側ページの左 5602 はソバの図で、*P. Fagopyrum* L.として下にその来歴が書いてある。